立正大学博物館 館報

万吉だより

MA GECHI NEWS

第 20 号 平成 27(2015) 年 3 月

江戸時代の墓誌

館長　池上　悟

江戸時代の埋葬においては、古代の上層貴族・僧侶に限定的に使用されていた墓誌が、復活して儒者と武家の墳墓に埋納されています。

江戸時代は封建制が確立した時代であり、徳川将軍家のもとに 300 諸侯が全国に配置され、それぞれの家臣、直接生産にあたった農民、都市に住まった町人など、身分・階層に従った墳墓規制が実践されています。

墳墓に造立された石塔は、将軍家に宝塔が独占され、各地の大名は中世の造形にとらわれない独特の石塔を多く造立しています。幕府直臣の旗本の墓石は、江戸時代初頭には宝篋印塔、五輪塔、無縫塔の塔形石塔のほか、新たに創案された尖頂舟形墓標、屋弛形墓標などが認められます。しかし寛文頃から家格に従った墓石規制がおこなわれ、石高の高い旗本墓には宝篋印塔、小禄の旗本の墓には笠付方形墓標が使用されています。

これら墓所の可視的な上部施設とは異なって、埋葬に伴って地下に埋納される墓誌には、特に身分・階層に従った規制は行われなかったようです。江戸の封建制の思想的背景として儒教が位置づけられており、埋葬にも儒葬の影響が及んだものと想定されています。丁寧な埋葬施設は儒葬に起源することが想定されており、古代中国に起源する墓誌もまた儒葬に基づくものと理解されています。

儒者は仏教の葬制の中に儒葬を実践しており、儒者のすすめによって大名の中には儒葬を実践した例も認められます。水戸徳川家、備前池田家、阿波蜂須賀家などであり、水戸徳川家では史料によって墓誌も使用されたものと想定されています。

江戸時代の墓誌には、凸形の底と凹形の蓋を組み合わせた合せ蓋式の墓誌が特徴的です。儒者の墓に埋納された墓誌は横長の合せ蓋式のものであり、武家では縦長の形状に区分して使用されています。この区分は厳格に守られていたようです。墓誌の研究も、江戸時代の葬制を把握するためには重要な視点と思われます。

第９回企画展
立正大学のあゆみⅡ―軌跡と躍進―

立正大学は、その淵源を飯高檀林に求めることができます。飯高檀林は、天正８（1580）年に日蓮宗僧侶の学問所として下総国飯高郷（現在の千葉県匝瑳市飯高）に創設され、295 年間もの長い間、多くの学僧を世に送り出してきました。

その後、日蓮宗では、明治５（1872）年８月に従来の檀林廃止の通達を出し、東京の芝、二本榎の承教寺内に日蓮宗小教院を設置し、諸宗に先駆け一宗独立の教育機関を創設しました。

明治 37（1904）年には、現在の品川東大崎の地に土地を購入し、日蓮宗大学林として新たな出発を果たしました。

そして、大正 13（1924）年５月 17 日、大学令による「立正大学」の認可がおり、日蓮宗僧侶の教育機関から、一般学生も受け入れる大学となりました。

平成 26 年度より大崎キャンパスは、将来の飛躍を期待して“品川キャンパス”と名称が変わりました。この平成 26（2014）年は、大正 13（1924）年に開設された立正大学文学部が 90 周年を迎えた年です。

また、昭和 56（1981）年に熊谷キャンパスに開設された法学部は、品川キャンパスへの移転が開始されました。

立正大学博物館においても、平成 26 年４月に品川キャンパス９号館エントランスに展示スペースを確保し、新たな博物館活動がスタートしました。

これらを記念して、品川・熊谷両キャンパスの学生や多くの方々に立正大学のあゆみを知っていただくため、本展示を企画しました。

当館では過去にも「立正大学のあゆみ」（平成 19 年度第４回企画展）を開催し、立正大学の歴史を紹介してきました。この度の展示では、第４回企画展の内容に加え、文学部と法学部にスポットをあて、各学科の紹介や、昭和 30 ～ 40 年代頃の授業風景写真の展示を行いました。

第９回企画展パンフレット

博物館第１展示室における企画展展示の様子

企画展の開催期間は、品川キャンパスでは、平成 26 年６月 24 日（火）から９月 25 日（木）、立正大学博物館では、平成 26 年 11 月５日（水）から 12 月５日（金）でした。

第９回特別展
近世の墓石と墓誌を探る

平成 26 年度の特別展として、近世の墓石と墓誌をとりあげました。

立正大学博物館に所蔵されている資料は、文学部考古学研究室が長年収集してきた資料が主体を占めています。この資料の中には、古代から近世に至る多くの墳墓関連資料が含まれており、平成 21 年には第 6 回特別展「題目板碑の世界」、平成 22 年には第 7 回企画展「古代・中世の武蔵国の骨蔵器」を展示しました。今回はこの一連の企画として「近世の墓石と墓誌を探る」と題して行いました。

この度の展示では、近世の支配者階層である武家の墓石ではなく、農民・町人身分の墓石を扱っています。近世墓石は、地域社会の確立にともなって 17 世紀後半代に造立が定着しており、現在でもその多くが寺院境内墓地などに残されています。

第 1 部では、関東地方において近世初期に造立された墓石である、廟墓・屋弛型墓標・尖頂舟形墓標を紹介しました。関連資料として、廟墓内に納められていた、銚子砂岩製一石宝篋印塔 1 基、銚子砂岩製一石五輪塔 2 基、その他に静岡県浜松市採集の一石五輪塔 1 基、大田区池上本門寺境内墓地所在の初期（元和年間）尖頂舟形墓標の拓本 2 点などを展示しました。

第９回特別展チラシ

第 2 部では、立正大学博物館の所在地である熊谷市内の近世墓石の様相をまとめました。当館では、平成 21 年度より博物館学芸員課程の館務実習の一環として、近世墓石を対象とした資料収集実習を行ってきました。その資料集成の成果として、江戸時代における墓石造立の変遷や、墓石から伺える階層性、熊谷市域の石工について紹介しました。

第 3 部では、当館所蔵の越智松平家斉厚（上野

博物館第 1 展示室における特別展展示の様子

館林藩３代・石見浜田藩初代）夫人の石製墓誌１組と、荒川区の善性寺（日蓮宗）所在の越智松平家一族の墓誌（このうち拓本３点を展示）を集成し、近世における墓誌の様相をまとめました。

この第９回特別展は、平成 27 年１月 28 日（水）から２月 27 日（金）まで、博物館第１展示室において開催しました。

平成 27 年４月より、品川キャンパス９号館エントランスにて移動展示を行う予定です。

【関連事業】

平成 27 年２月７日（土）に「近世と墓石と墓誌を探る」と題し、池上悟館長による講演会が品川キャンパスにて行われました。

訃　報

港区郷土資料館にて
（平成９年）

江坂輝弥先生は、平成 27 年２月８日に享年 95 歳でご逝去されました。謹んでお悔やみ申し上げます。

先生は昭和 49 年から平成６年の長きにわたって立正大学にご出講頂き、多くの学生に縄文文化・東アジアの考古学を講義して頂きました。また立正大学博物館へは、平成 18 年に多くの写真資料をはじめとする「江坂資料」を寄贈して頂きました。未だ整理途上にありますが、博物館資料として活用していきたいと思っています。

NEWS ①

入館者数

平成 26 年４月１日から平成 27 年２月 28 日の間、延 183 日開館し、総来館者数は 914 名でした。内訳は、一般の方 341 名、本学学生 195 名、本学教職員 44 名、高校生以下の方 38 名でした。以上の期間に熊谷キャンパスにおいてオープンキャンパスが４回行われました。その際の来館者数は 296 名でした。

土器焼き

土器焼きは例年、文学部史学科の「考古学実習６」（４年生対象）の一環で行われています。

今年度も、平成 26 年 11 月１日（土）・２日（日）の２日間、博物館が協力し、熊谷キャンパス敷地内において行われました。参加者は、考古学専攻生９名、大学院生２名で、講師の竹花宏之先生の指導の下、野焼きで土器を焼成しました。

土器焼成の様子

焼成中の土器

館務実習

平成 26 年度の博物館学芸員課程の館務実習を以下の日程で延９日間行いました。実習生は 14 名で、その内訳は、文学部史学科 10 名、文学部哲学科２名、仏教学部仏教学科２名でした。

［資料収集実習事前講義］

◆７月 16 日（水）６限　品川キャンパス

池上悟館長が、資料収集実習の調査方法について講義を行いました。

［資料収集実習］

◆７月 20 日（日）・21 日（月）

池上本門寺の境内墓地において、近世墓標の調査を行いました。調査カードに墓標の型式・大きさ・石材・銘文などの情報を記録し、写真撮影を行いました。

［館務実習］博物館及び、熊谷キャンパス内

◆８月７日（木）

午前は、資料収集実習のまとめとして、池上悟館長による文化史の講義を行いました。

午後は、資料収集実習で作成した調査カードを元に、収蔵資料台帳作りを行いました。

◆８月８日（金）

担当：井上尚明先生（元埼玉県立博物館館長）

資料の取り扱いと梱包について学びました。実際に梱包材を作り、収蔵資料を梱包し、開梱する一連の作業を行いました。

◆８月９日（土）

担当：田鴇和久先生（文学部社会学科准教授）

日本刀の概要ついて学び、刀剣の取り扱いと手入れの実習を行いました。

◆８月 11 日（月）

担当：紺野英二先生（文学部史学科非常勤講師）

博物館展示の展示方法について講義を受けた後、実際に博物館内のパネル作成と展示作業を行いました。

◆８月 12 日（火）

担当：石山秀和先生（文学部史学科准教授）

古文書の取り扱い方や、調査方法を学び、実際に古文書と和本の調査カードを作成しました。

◆８月 13 日（水）

担当：川野良信先生（地球環境科学部教授）

岩石学の基礎知識を学びました。事前に荒川河川敷にて採集した岩石などを使用し、岩石標本を作製しました。

館務実習の様子

収蔵資料紹介①
立正大学博物館所蔵の埴輪について（2）

立正大学大学院博士課程　足立佳代

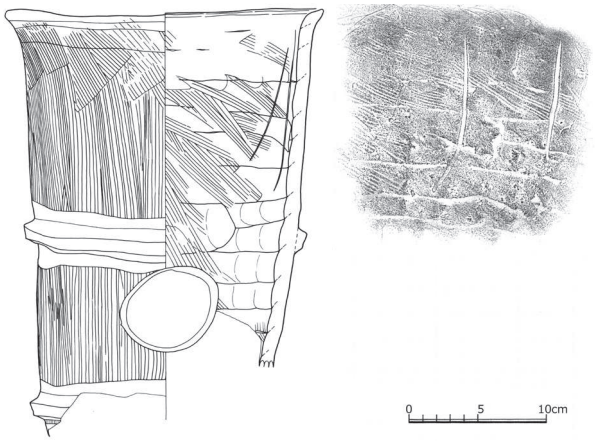
今回紹介する資料は、立正大学博物館に所蔵されている円筒埴輪２点のうちの１点です。

元立正大学博物館館長である坂詰秀一先生の著書に写真が掲載されています。その解説によれば、森本六爾が昭和元（1926）年に発掘調査した東京都大田区の下沼部埴輪生産址[1]から出土したものとされ[2]、埴輪の外面には「池上町久ケ原」と注記されています。

埴輪の観察

本資料は円筒埴輪の上部で、下部は欠損していますが、２条３段の円筒埴輪と思われます。現状で高さは、32 cm、口径 23 ～ 23.5 cm、厚さは 10 ～ 12 ㎜程度と全体に薄い造りになっています。各段の高さは、最上段、３段目が約 15.5 cm、２段目が約 13 cm で、３段目が長いのが特徴的です。２段目には円形の透孔が２孔対であけられています。透孔は横方向の直径約７ cm、縦方向の直径６ cm です。突帯の断面は台形を呈しています。口唇部は、端部が受け口状につまみ上げられています。

外面の調整は、タテハケによる一次調整ですが、口縁上部にタテハケの後、斜め方向のハケ調整を施している点が特徴的です。口縁端部は工具状のもので強くナデられています。突帯を貼付けその上下をナデつけていますが、突帯の粘土の貼付け方があまく、位置によっては突帯が面から浮いています。また、突帯の調整は、工具状のもので強くナデつけられ、条線が残っています。



第１図　「池上町久ヶ原」円筒埴輪

内面は、粘土帯を輪積みした痕が明瞭に残り、上に積んだ粘土を指で上から押しつけながら接合したようすが見られます。さらに縦方向とやや斜め方向のハケ調整が施され、口縁はナデによってハケメが消されています。ただし、全体の４分の１ほどにはハケメが見られません。

口縁部内面に「川」の字状に３本の線刻がありますが、中央とその右側の線は明瞭で、左側の線は表面を軽く引掻いたようで、はっきりとした線ではありません。

焼成は良好であり、焼き上がりは堅緻、色調は明褐色です。胎土はやや密ですが、直径３～ 10 ㎜ほどの小石が混入しています。

まとめ

本資料は、２条３段の円筒埴輪で、タテハケ、円形透孔、３段目が長い形態をもつという特徴があります。こうした特徴は、城倉正祥氏が設定する、北武蔵における埴輪生産の定着期にあたるⅢa 群に類似しています。北武蔵地域は、埴輪生産において、情報を発信する立場にあるとされ、６世紀初頭から前半に南武蔵や東北地方にも類似した埴輪が知られています[3]。本資料も、北武蔵の影響下にあった可能性があります。

下沼部埴輪製作址については、報告に掲載された埴輪の所在は不明で、本資料が唯一といえるものです。『万吉だより』第 19 号に報告した朝顔形埴輪とともに今後も調査を続け、報告する予定です。

資料紹介にあたり、坂詰秀一先生、池上悟先生、日高慎氏にご教示いただきました。記して感謝いたします。

【註・参考文献】
(1) 森本六爾「埴輪製作所址及窯跡」『考古学』第１巻第４号　昭和 5(1930) 年
(2) 坂詰秀一『日本の古代遺跡 32：東京 23 区』保育社　昭和 62(1987) 年
(3) 城倉正祥『埴輪生産と地域社会』学生社　平成 21(2009) 年

収蔵資料紹介②『雅楽多市』と久保常晴コレクション泥面子（前）

立正大学博物館学芸員　池田奈緒子

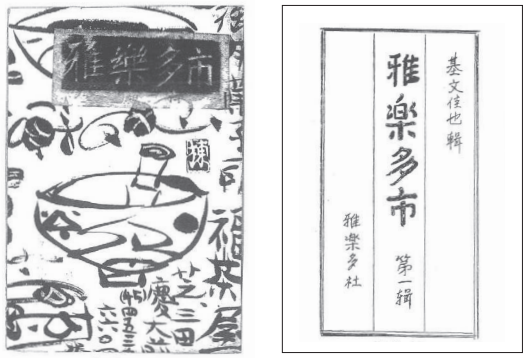
久保常晴博士は、明治 40（1907）年に北海道旭川市に生誕され、昭和 6（1931）年に立正大学文学部史学科に入学され、昭和 9（1934）年に卒業されました。昭和 22 年以降、昭和 52 年まで立正大学にて教鞭をとられました。

久保先生はご専門とされた仏教考古学の研究の傍ら、自ら「瓦礫多（がらくた）」と称する様々なモノの蒐集を趣味にされていました。昭和 32(1957) 年には趣味が高じて、同好の志と共に、自らは基文佳也というペンネームで『雅楽多市』というガリ版刷の同人誌を発行されています。

その発刊の辞には「（前略）人が一顧をも省みぬ破棄して了うであろう瓦礫多であろうとも、此等を蒐集して、誰しもが多少とも持つ蒐集本能を満足させ、更にその中に時代の流れ、美的価値を発見して行くのも又些々たる人間的向上えの追求でもあろう。然し単に此等の種々を秘庫に死蔵するは、物云わざるは腹ふくるゝ業の譬えにも似たるもの、故に此処に腹ふくれたる同志を語らい、一巻を物す。題して雅楽多市と名付く。（後略）」とあり、「瓦礫多」蒐集の意義を示すとともに、一般的には価値を有さない「瓦礫多」のなかに時代性や美術性を見いだそうとする考古学者ならではの視点も垣間見ることができます。実際に久保先生の執筆文は多様で、実に多趣味なことがうかがえます（表）。

その『雅楽多市』第 1 輯に掲載された一文が「蒐集の泥面子」です。これに報告された 15 点を含む 48 点の泥面子が久保常晴コレクションとして当館に収蔵されています。

【参考文献】
坂詰秀一「追憶久保常晴先生」『考古学論究』第 8 号　平成 14(2002) 年



『雅楽多市』第一輯

輯数	発行年	頁数	久保先生執筆文
1 輯	昭和 32 年 7 月	20	発刊の辞、蒐蔵の泥面子、川崎三大デパートのラベル
2 輯	昭和 32 年 11 月	32	長禄江戸図、古くて価値少なき御札（オサツ）、安切手二種ー新小判二銭・東宮御始儀三銭ー、偶感ー省電内で
3・4 合輯	昭和 33 年 10 月	42	日本万国博覧会、酒場談義
5 輯	昭和 34 年 12 月	36	雅楽多趣味からみた御成婚記念概説、北海道の駅名ーー週間の旅を偲びー、随想

表　『雅楽多市』発行年と久保先生執筆文

久保先生蒐集の泥面子

NEWS ②

資料活用

平成 26 年 10 月 1 日から平成 27 年 2 月 28 日までの期間に、当館所蔵の資料を以下の機関に貸出を行いました。

◆ネパール・ティラウラコット出土資料　11 点
貸出機関：立正大学政策広報課
利用目的：島根県松江市　中村元記念館における「立正大学のあゆみ展」での展示のため

出版物

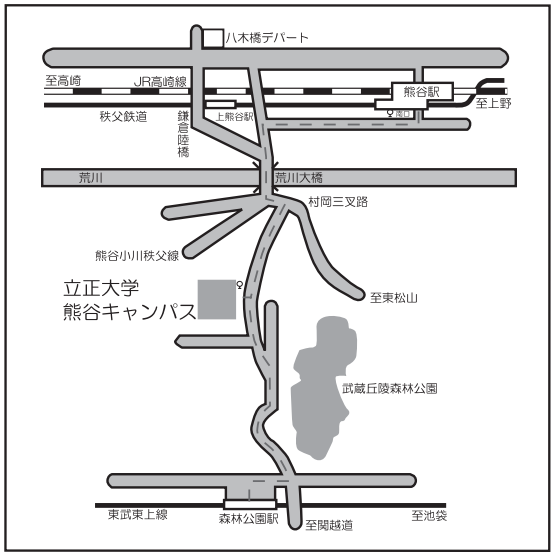
平成 26 年 9 月 30 日から平成 27 年 2 月 28 日までの期間に、当館では以下の出版物を刊行しました。

◆万吉だより　第 19 号（平成 26 年 9 月 30 日）
◆品川キャンパス展示リーフレット
『立正大学が調査した古代窯跡』（平成 26 年 11 月 1 日）
◆第 9 回特別展リーフレット
『近世の墓石と墓誌を探る』（平成 27 年 1 月 20 日）
◆第 9 回特別展図録『近世の墓石と墓誌を探る』
（平成 27 年 1 月 28 日）

利用案内

所在地：〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
立正大学熊谷キャンパス内
TEL　048 － 536 － 6150
FAX　048 － 536 － 6170
開館日：月・水・木・金・土曜日（大学休業中を除く）
開館時間：　10：00 ～ 16：00
※詳細につきましては、博物館ホームページをご覧下さい。
交通機関：
① JR 高崎線、北陸新幹線、秩父鉄道「熊谷駅」下車。南口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 10 分。
②東武東上線「森林公園駅」下車。北口より立正大学行バス（国際十王交通）で約 12 分。

お問い合わせ：博物館または熊谷総務部総務課（048-536-6010）にご連絡下さい。



あとがき

今年度は、江坂輝弥先生・三宅敏之先生よりご寄贈いただいたネガ・スライド・写真などの資料整理を開始しました。膨大な資料数のため、まだまだ時間がかかりますが、貴重な資料を広く活用出来るよう、来年度も継続して作業を進めて参ります。

また、前号から 2 回にわたり、当館所蔵の埴輪について足立佳代さんに報告をいただきました。ありがとうございました。

（池田）

立正大学博物館館報　万吉だより　第 20 号
平成 27（2015）年 3 月 24 日発行
編集・発行　立正大学博物館
〒 360-0194　埼玉県熊谷市万吉 1700
TEL 048 － 536 － 6150
FAX 048 － 536 － 6170
E-mail ： museum@ris.ac.jp
URL ： http://www.ris.ac.jp/museum/index

題字揮毫　田淵観斎（立正大学名誉教授）

（印刷：アサヒコミュニケーションズ）